

---

# 日本の穀物栽培・農耕の開始と農耕社会の成立

—さかのぼる穀物栽培と生産経済への転換—

---

The Beginning of Cereal Cultivation and Agriculture, the Formation of the Agricultural Society in the Japanese Archipelago: The Interaction between the rising up of the cereal cultivation and the transformation to the food production

藤尾慎一郎

FUJIO, Shin'ichiro

[Abstract] This paper focuses on three matters. First, the relationship between the Jomon people and rice from beginning of rice cultivation to beginning of wet rice agriculture. Second, the reason why the Indigenous people in Japanese Archipelago suddenly began a wet rice agriculture in about 5th BC. Third, the significance of the formation of the Yayoi culture.

1 Jomon people located the rice cultivation on the one way of the food acquiring in same to Chulmun pottery culture in the Korean Peninsula.

2 Jomon people began wet rice agriculture because of a immigrant with bronze instruments from the southern part of the Korean Peninsula in where the Mumun pottery people transformed from rice cultivation to a wet rice cultivation with a irrigation system in about 7th or 6th B.C.

3 I defined the Yayoi culture as the first agricultural and metallurgical culture in the Japanese Archipelago. This culture was formed in far from the center of civilization under the bronze instrument culture of the middle Mumun Pottery culture in the Korean Peninsula.

## はじめに

今、日本列島の穀物栽培の歴史が見直されつつある。本格的な水稻農耕が前5世紀頃に始まることに異論のある研究者は少ない。<sup>(1)</sup>しかし穀物栽培がいつ始まったのかという点になると、最近の調査はその年代を急速にさかのぼらせつつある。

稲作に関する限り、考古学的には前1500年頃にさかのぼる可能性が指摘され始めている〔平井1995〕。その最大の根拠は縄文後期後葉や晩期に属する粉痕土器（写真1）である。もちろんこれだけでは栽培されていたとはいえないが、少ないながらも農具状の石器や土器の胎土中から見つかったプラント・オパール<sup>(2)</sup>の存在からみて、栽培の可能性を否定できない状況になっていることもまた事実である。

プラント・オパールだけをとってみると、約1万年前までさかのぼるデータも得られているという<sup>(2)</sup>〔高橋2001〕。一方、ヒエなどの雑穀栽培については、植物遺体やプラント・オパールから約6千年前までさかのぼる可能性が指摘されている〔吉崎1995〕。これらが事実とすれば、日本列島の雑・穀物栽培は世界的にみてもかなり古く始まっていたことになる。

しかし冒頭でも述べたように、縄文人が本格的な農耕生活を始めるのは前5世紀頃なので、雑・穀物の初現および予想される栽培がさかのぼればのぼるほど、本格的な水稻農耕を開始するまでの時間が長くなっていくことになる。しかもその始まりは、生業全体に占める穀物栽培活動の割合が漸移的に増えていって起こる、といった状況ではなく、長期にわたり補助的な位置づけをなされていた雑・穀物の栽培活動が、前5世紀頃に一気に本格化して起こるというのが実態に近い。

このような状況のもとでは、当然、次のような疑問がうまれる。縄文人はコメや雑穀を知った時点で、どうしてすぐに農耕生活に入らなかったのであろうか。かつて縄文人はコメを知るやいなや、神の手に導かれるように農耕生活を始めたと説明されてきた、直線的な発展段階説とは明らかに異なっている。穀物や雑穀を知りながらも補助的な手段にとどめ、農耕生活へ転換しない生活を千年以上も続けていたことになる。また千年以上もそうしてきた縄文人が、前5世紀頃になって急に前方針を転換し、農耕生活へと転換したのはなぜか。前10世紀でも、前7世紀でもなく、どうして前5世紀なのか。そこには何か歴史的な必然性があるのでは<sup>(3)</sup>あろうか。

そこで本稿では、以下の問題について考えてみたい。まず、縄文人がコメを作っていたとしたら、それはどのような内容だったのか。いわゆる縄文稲作と弥生稲作との間に違いはあるのか、違いがあるとすればどこが違うのか。その違いは稲作を長い間、補助的な手段にとどめていたことと関係があるのかどうか考える。

次に縄文人が補助的とはいえ稲作をおこなっていたとしたら、少なくとも西日本の縄文後期以降は、農耕・牧畜を指標とする新石器時代に該当するのであろうか。

最後に、縄文人が本格的な農耕を始めるまでの過程を、福岡平野を例に復原するとともに、前5世紀頃に日本列島で本格的な農耕生活が始まった直接的な契機を、前7～6世紀頃に朝鮮半島南部地域で始まった水稻農耕と農耕社会の成立に求めることにする。その後、九州北部において農耕社会が定着・発展していく過程を三つの段階に整理したあと、弥生文化成立の世界史的意義について考えてみたい。

## 1. 縄文稲作の実態

### 1 雑穀・コメ存在の証拠

コメが存在したことを示すもっとも古い考古学的な証拠は、岡山県南溝手遺跡から出土した縄文後期後葉の粃痕土器である（図1）。また自然科学的には同県朝寝鼻貝塚の前期に属する包含層から検出されたプラント・オパールで、約6千年前と考えられている。プラント・オパールは未発表資料も含めると、1万年前までさかのぼっているという。一方、雑穀はイヌビエを野生種と考えられている縄文ヒエが約6千年前までさかのぼる。

イネは日本列島に自生しないので中国起源の栽培種であるコメが、列島外から持ち込まれたことになるが、縄文ヒエが自生するイヌビエを祖先とするならば、縄文人が馴育したことを示す列島唯一の雑穀ということになる。いずれにしても、前1500年頃の西日本に栽培種のコメが、6千年前の北日本には縄文ヒエが存在したことは間違いない。

Fig. 1 Photograph of rice remains: impression on pottery discovered from Minamimizote site, Okayama Pref. 3100 B.P., latest Jomon.

図1 岡山県南溝手遺跡出土靨痕土器（晩期，約3100年前）

Fig. 2 Harvest and cultivation tools for cereals discovered from Minamimizote site, latest Jomon.

図2 南溝手遺跡出土石器（晩期）

## 2 稲作の証拠

コメが存在しただけでは稲作がおこなわれていたと断定することはできない。南溝手では稲作が存在した証拠として、晩期の包含層から出土した農具状の形をした石器（図2）、土器の胎土から見つかったプラント・オパールがあげられている。

プラント・オパールは、弥生時代の包含層と、靨痕土器と同じ後期の土器の胎土中から見つっている。農具状の石器は晩期相当と考えられている。したがって後期後葉の稲作との関係が認められるのは、胎土中のプラント・オパールということになる。後者は土器づくりをおこなう場所の近辺にワラや靨殻などが数多く散乱していたことを意味するので、コメだけが持ち込まれたのではなく、ワラがついた形で持ち込まれたことになる。

晩期に属する農具状の石器は、収穫具と考えられる剥片石器（図2-S29）と、耕起具と考えられる打製石斧（同-S35）である。また遺跡の周辺には低湿地が広がっていることから、水田の可能性も考えられている。これらの状況証拠からどのような稲作が想定できるのであろうか。

## 3 縄文稲作の実態

南溝手で見つっているのは、わずかな農具状の石器とプラント・オパール、そして少なくともコメを作ることができる環境が存在することであった。また畠や水田などの生産遺構が確認できていないし、コメの遺体も未発見である。

このような状況証拠から推測できる稲作は、採集や狩猟・漁撈活動に替わって生業の中心になっていた訳ではないということである。弥生稲作が始まった結果みられるような道具・技術・社会などの本質的な変化を引き起こした状況証拠は認められないからである。それではどのようなコメ作りが考えられるのであろうか。生業全体のなかで補助的な手段にとどめた稲作とは、具体的にはどのようなコメ作りを意味するのであろうか。弥生時代の稲作と比較しながら考えてみよう。

日本最古の農耕集落の一つである福岡県板付遺跡、縄文後期の南溝手遺跡、そして弥生前期に属する青森県砂沢遺跡で見つかっている考古学的証拠を、生産地、農工具、社会面・祭祀面の変化という側面から比較してみよう（表1）。

表1 縄文稲作と弥生稲作の違い Tab.1 The difference between Jomon Farming and Yayoi Farming

遺跡名 Site 属性	南溝手遺跡 Minami-Mizote	砂沢遺跡 Sunazawa	板付遺跡 Itazuke
生産地 field or paddy field	?	灌漑施設を備えた水田 paddy field with irrigation system	灌漑施設を備えた水田 paddy field with irrigation system
農工具 agricultural and modify tool	耕耘・収穫具状の石器 stone instrument for cultivating and harvesting	木製農具・縄文系加工用 の打製石器 wooden agricultural tools, chipped stone tool for modification	木製農具・大陸系の磨製石 製工具・鉄製工具 wooden agricultural tools, polished stone tool diffused from China and Korea, Iron instrument
社会面 social	変化なし no change	変化なし no change	質的転換 naturally transformation
祭祀面 rite of veneration	変化なし no changed	変化なし no change	質的転換 naturally transformation

まず生産地は、南溝手では未確認だが、砂沢と板付では灌漑施設を備えた水田が検出されている。

農工具は、粉痕土器の時期とは異なる晩期に属する耕耘具と収穫具状の打製石器が少量出土した南溝手、木製農具と縄文系加工用の石器をもつ砂沢、木製農具、大陸系磨製石器、鉄製工具など、朝鮮半島南部と同じセットの農工具をもつ板付にわかれる。

南溝手と砂沢には社会面と祭祀面に変化が起こった兆候は認められないが、板付では前4～3世紀頃に環壕集落の出現や、厚葬・青銅器の副葬などの、農耕社会の成立に伴う社会面の質的な転換が、また前2世紀前半には、青銅器副葬や墳丘墓などの祭祀的側面の質的な転換が起きていることがわかる。

以上、三遺跡の比較から、砂沢が南溝手と板付の中間的様相を示すことがわかる。すなわち砂沢は、灌漑施設を備えた水田や定型化した木製農具という弥生独自の文化要素と、加工用の剥片石器や縄文系の壺以外には変化が認められないその他の土器、土偶・土版を使った従来通りの祭祀という、縄文以来の要素をあわせもっている。そして板付はすべての面にわたって完全に転換を終了し弥生化を完了している。

砂沢がみせたあり方は以下のような歴史的意味をもつと考える。すなわち、水田稲作や水田、木製農具など、新出でその時代の生産に関する最先端技術や、従来もっていなかった道具は受け入れるものの、木製農具を作る加工用石器や土器づくりに対する姿勢、祭祀などの、変更する必要のな

い要素や代替えがきく要素は、伝統をそのまま継承している。

次に南溝手にはすでに同時期の朝鮮半島に出現している耕耘具と収穫具状の打製石器が存在する一方、まだ出現していない道具類も当然のことながらある。またそれ以外の道具は縄文以来のものである。ここでも新出のものは採用し、従来のものでまかなえるものはそれで間に合わせるという姿勢がみられ、南溝手と砂沢は共通点をもつのである。とくに生産関係に関する要素にその傾向が強く、社会面、祭祀面など抽象的になっていくものほど、なかなか採用されにくい。

それに対して板付も、生産に関する新出の要素はすべてを受け入れ、機能的に変わらないものは在来の道具で間に合わせるという点に砂沢との共通点を見ることができ。しかし、社会面・祭祀面となると砂沢との違いが際だってくる。すなわち、砂沢が土偶・土版で水口祭祀をおこなうのに対して、板付では丹塗りの壺を用いる点など、農耕祭祀というソフトを受け入れている点が異なる。

さらに板付では、弥生稲作が定着するにつれ、安定した農耕社会が成立し、戦いや階層化の顕在化、副葬・厚葬の開始など、社会的な変質が起こってくる点も砂沢との大きな違いである。

したがって灌漑施設を備えた水田でコメを作っても、砂沢と板付では結果的に質的に異なる展開をみることができた。両者の違いは、祭祀面までを含めて栽培活動に専門化するための枠組みができていたかどうかにある。水田稲作に専門化し、農耕社会の形成という古代化の第一歩をふみだすための生産基盤として水田稲作が位置づけられていたかどうか、砂沢と板付の本質的な違いと考えられる。

以上の点から考えると、砂沢と多くの共通点をもつ南溝手でおこなわれていた可能性のある縄文時代の稲作とは、板付に代表される弥生時代の稲作とは明らかに異なっていると予想される。また逆に弥生時代におこなわれた砂沢の稲作が、縄文時代の稲作の範疇に属する可能性さえ議論の俎上にのぼってくるのである。

すなわち想定される縄文時代の稲作（縄文稲作）とは、社会的・祭祀的な転換を引き起こさないもので、網羅的な生業構造の一つであった。<sup>(4)</sup> しかも弥生時代のコメがもつ拡大再生産の余剰に代表されるような、食料以外の意味はもっていなかったのではなかろうか。

## 2. 縄文時代は日本列島の新石器時代といえるのか

以上のように、西日本縄文人の中心的な食料獲得手段が一貫して堅果類や根茎類などの森林性食料の管理・採集中心であったこと、雑・穀物を栽培していたとしてもその割合は低く、網羅的な生業構造の一つであったことは従来の考えと変わらないことを確認した。

しかし部分的であったとしても穀物を栽培していたとしたら問題が生じる。南溝手の靱痕土器の鑑定結果によれば栽培種のコメであることが確認されているので、栽培種を栽培していたことになるからである。これはG・チャイルドの新石器時代に関する定義にしたがう限り、少なくとも後期後半以降の西日本は新石器時代の段階にあった可能性がでてくるのである。北日本における6000年前以降も同様である。

そこで地球上でもっとも早く穀物栽培が始まり、新石器時代研究の中心地である中近東で、新石器時代の指標となる穀物栽培の比率がどのくらいなのかみてみよう。中近東で新石器時代が始まった段階における全生業にしめる穀物栽培の比率は、補助的といえるものだったのか、それとも中心

的な存在だったのであろうか。

中近東では野生種であるエンメル小麦を集約的に収穫し、ヤギやガゼルを狩猟・飼育する中石器時代に属するナトゥーフ文化期（約1万1千年前）から、野生種の収穫と播種が併存する段階（前9千年）、栽培種のムギがでてくるPPNA段階（前8300～7600/7300年）をへて、小麦や大麦の栽培農耕が始まるPPNB段階（前7600/7300～6000年）へと移行する過程が明らかにされている。また動物利用においても野生動物が主の段階から家畜が主になる段階へと逆転していく過程も明らかになっている。

すなわち、野生種のムギ、野生の動物を収穫・狩猟する段階から、栽培種の穀物栽培や家畜飼育が始まって、その比重が高まっていき、本格的な農耕生活へ移行していく過程を把握することができる。それでは中近東ではいつから新石器時代といわれているのか。それは栽培種のムギを栽培し始めるPPNA段階なのだが、これは栽培や家畜の割合がまだ主になっていない段階なのである。つまり中近東では穀物栽培や家畜の比重は問わず、栽培種の栽培が始まった時点をもって新石器時代と規定していることがわかる。

中近東では約9000年前にコムギ・オオムギ・マメ類が栽培されはじめてから、約2千年あとに社会の質的転換が起こるとされているため、新石器時代は9000年ほど前から7000年ほど前の約2千年間も含むことになる。

日本列島においては、穀物栽培が始まってから生業の中心になっていくまでの過程は依然としてよくわかっていない。また動物の利用については、縄文・弥生ブタの存在が近年知られるようになってきたが、実態は今後に期す部分がまだ多い。

中近東のように、生業に占める栽培活動の比重がどうであろうとも、栽培種の栽培を一部でも始めていれば新石器時代という基準を適用するとすれば、西日本の縄文後期後半以降は新石器時代といってもおかしくないことがわかる。

しかし問題の本質はこのようなところにあるのではない。今や、生業に占める穀物栽培の割合どころではなく、農耕の有無で新石器時代かどうかを判断すること自体、再考すべき段階にはいっていると考えている。その理由は、穀物栽培の始まりを指標に新石器時代と判断できる地域が世界的にみてきわめて限られることをふまえて、もう少し普遍的な指標を模索する動きの存在である。つまり、中近東や中央ヨーロッパ・中国という特殊な生態系をもつ地域にのみ適用できる農耕・牧畜の始まりを指標とする新石器時代の定義を、世界的な指標足りうる、定住の始まりに変更してはどうか、という提言である〔藤本 2000〕。

すなわち更新世から完新世への気候変動によって、食することが可能な植物が大量に確保できる生態系をもつ地域において、定住が始まる時点をもって新石器時代と認識するものである。可食植物は野生の草原性植物でも、堅果類や根茎類などの森林性植物でもかまわない。それは生態系によって当然異なるものだからである。問題は可食植物の違いなのではなく、それらをいかに効率よく獲得していくためのシステムを作り上げるかであって、後氷期をむかえた人類にとってもっとも重要な関心事だったはずである。

そのシステムとは対象となった植物の特性に応じて農耕であったり、採集であったり、管理であったわけで、システムの違いを農耕、採集、ホルチカルチャーと呼び分けているに過ぎないのであ

る。

したがってもし農耕を指標に時代を設定するとしたら、藤本強が指摘するように、本格的な農耕が始まる時点を指標とするべきで、日本列島の場合なら、古代国家成立へ向けての第一歩を踏み出す弥生時代こそそれにもっともふさわしいということになる〔藤本 2000〕。完新世の場合は、穀物栽培の始まりを指標とするべきではなく、世界的に広く適用できる別の指標を考えるべきであろう。<sup>(5)</sup>

### 3. すぐに農耕民化しなかった縄文人

#### 1 拡がる両者の時間

本格的な水稻農耕は前5世紀頃に九州北部沿岸地域で始まる。板付遺跡で見つかった灌漑施設を備えた大区画水田や環壕集落の出現から、前3世紀には質的な転換を遂げた農耕社会が成立していたことは明らかである。

そうすると縄文人がコメを知ってから本格的な農耕生活へ変わるまでに少なくとも千年以上かかっていることになる。これは西アジアや中国などの農業起源地において、栽培が始まってから本格的な農耕が始まるまでにかかった時間に匹敵するほどの長さである。しかしこれらの地域と日本列島では、本格的な農耕生活へはいるまでの過程に大きな違いがある。西アジアや中国では野生種を栽培種にするという馴育（Domestication）段階をへて漸移的に穀物栽培の割合が高まっていったあとに転換するのに対して、日本列島では約1500年間、栽培が補助的な位置づけにおかれたまま、ほとんど変わらない状態が続いたあと、突然、本格化することである。

中近東では野生のコムギ類を採集し始めてから栽培するようになるまで2000年ほどかかっていた。現状では彼ら以前に栽培をおこなっていた人類はいないので、栽培へのプロセスはすべて彼らが生み出す必要があった。したがって栽培化を達成するには長期にわたる経験と伝統の蓄積が必要とされたのである。彼らが栽培活動の比重を高めていくきっかけは、前9000年前後から数百年間、継続したと考えられているヤンガー・ドリラス期の気候変動（寒冷化）にあるとする説がもっとも一般的である。それでは縄文人の場合は、何が転機となって本格的な農耕を始めるにいたったのであろうか。

縄文人の周りにはすでに文明が成立していた中国、穀物・雑穀栽培が始まっていた朝鮮半島という先進地帯があった。したがって縄文人にその気があれば先進地のやり方を取り入れさえすればよいのである。そこで九州北部にもっとも近い朝鮮半島南部における穀物栽培の本格化と生活の変化が、縄文人の農耕生活への転換を考えるために重要になってくる。

櫛目文土器時代後期（約4000年前）には朝鮮半島南部でもアワなどの雑穀を中心とした畠作がおこなわれていたと考えられている。またコメもその中の一つとして栽培されていた可能性もある。生産地などの具体的な調査例はまだないが、アワは釜山市東三洞貝塚で見つかったり、慶北・松竹里遺跡にみられるような打製石斧、サドル・カーン（鞍型スリ臼）、打製収穫具など、生産・加工用の定型化した石器も存在する〔啓明大・学校博物館 1994〕。これらの石器と南溝手の石器は程度の差はあれ、耕耘・収穫用と目される石器をもっているからである。

櫛目文土器時代の畠作が生業活動全体に占める割合は低いと考えられていることからすると、想定される縄文後期後半の縄文人の穀物栽培も同じであろう。このような方式が模倣されたものかど

うかはわからないが、櫛目文土器時代後期の畠作の位置づけが縄文人の網羅的な生業構造と一致していたことは確実である。縄文人が本格的な農耕生活へと入らなかったのは、お手本となる朝鮮半島南部地域でさえ、まだそういう段階には達していなかったからとも考えられるが、縄文の伝統的な生活様式からはそのような方法が独自に生まれ出てくることはなかったことだけは確かであろう。

それでは縄文人が千年以上も本格的な農耕生活へと入らなかった理由を考える前に、前5世紀頃に起こった本格的な農耕生活への急激な転換過程を福岡平野を例にみておこう。

#### 4. 急激な本格的農耕の始まり—福岡平野における農耕社会の成立—

前5世紀頃、九州北部の縄文人は、突如として本格的な農耕生活を開始した。水稻栽培を生業の中心に位置づけ、灌漑施設を備えた水田で本格的なコメ作りに取り組み始めた。前4世紀の終わり頃には環壕集落が出現し、戦いも始まっていることからみて、わずか百年足らずで社会は質的な転換を遂げ、農耕社会が成立したことがわかる。時代の最先端技術である水稻農耕関連技術の採用、社会組織・社会構造・流通・階層差などの社会の質的な転換、戦いの始まり、農耕祭祀の完成（前2世紀前半）によって、弥生型農耕社会は完成していく。

この大転換は、縄文後期後半の西日本で始まった可能性のある縄文稲作とは、契機や要因、転換過程に大きな違いがある。福岡平野において転換がどのように進んだのかみてみよう〔藤尾 1999〕（図3）。

##### 1 福岡平野における農耕社会の成立—三つの転換過程—

福岡平野で起こった転換過程を四つの視点で整理すると、三つの型に分けることができる。

##### 1) 四つの視点

まず第1にあげられるのは、転換するにあたり中心的役割を担ったのは誰かという、担い手の出自である。在来の人々（在来人、それ以前からこの地域に住んでいた人々の末裔）と外来の人々（渡来人を含む、福岡平野以外に出自をもち、本格的な水稻農耕をおこなっていた人々）がどのような係わり方をしたかによって異なる。

第2に転換した時期である。福岡平野では前5世紀頃と前3世紀頃に、在来民の農耕民化をみることができる。

第3に転換した場所である。縄文時代以来、在来人が生活の場としてきた本拠地である平野の上・中流域で転換する場合と、それまで在来人が有効に利用していなかった平野下流域の、水田に適した土地が広がる場所で転換する場合がある。

第4に弥生文化独自の土器を創造したかどうかである。板付Ⅰ式土器は朝鮮半島中期前半の無文土器を祖型に成立するが、似て非なる土器であって、弥生独自の部分をもっている。弥生独自の土器の創造がおこなわれた遺跡では、祖型となった中期無文土器系の土器や変容途上にある土器が数多く出土し、弥生土器が創り出されていく試行錯誤のあとをみることができる。

##### 2) 三つの転換過程

以上、四つの指標でこの地域の農耕集落が成立していくを整理してみよう。

まず担い手の出自は在来民単独と、在来民に外来民が加わった場合の二つに分かれる。外来民の

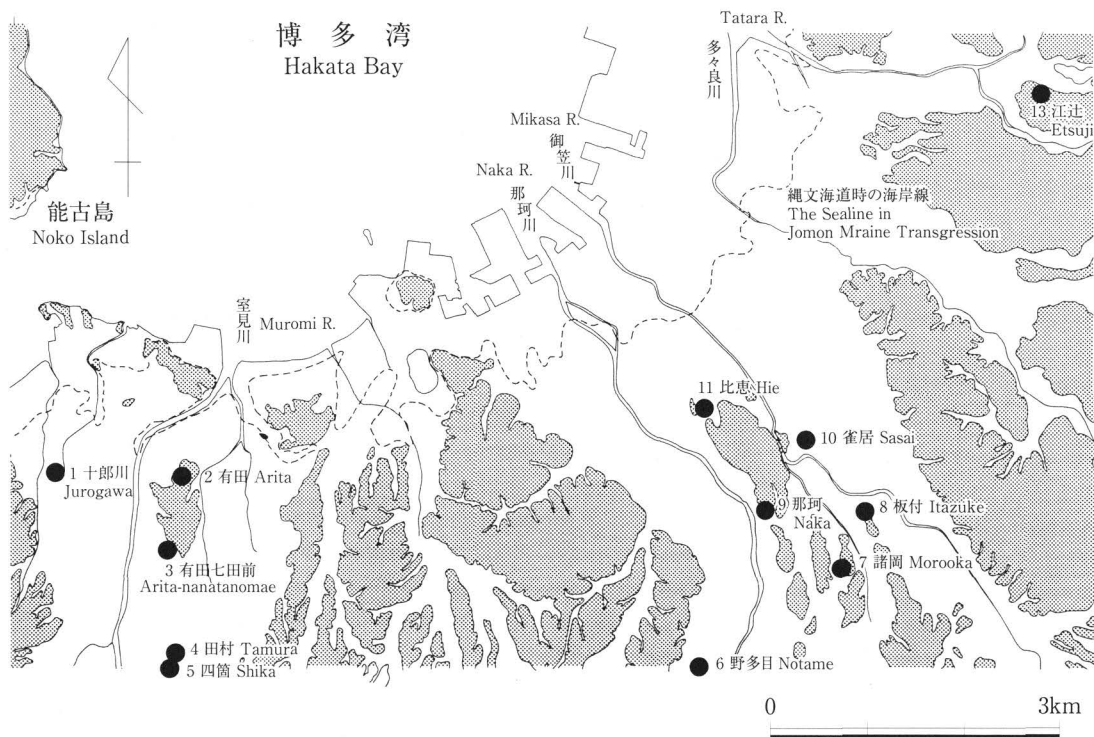


Fig. 3 The distribution of the sites at Fukuoka and Sawara plain, 2500 to 2300 B.P.

図3 福岡・早良平野における2500～2300年前の遺跡分布図

有無は、板付祖型甕、壺、大陸系磨製石器、木製農具などの保有状況から総合的に判断した。

在来民単独の集団は、縄文以来の本拠地である平野の中・上流域で、前3世紀以降（板付Ⅱa式）以降に農耕民化する。板付Ⅰ式土器の創造には基本的に関わっていない。

在来民に外来民が加わった集団が担い手の場合は、板付Ⅰ式土器創造の有無によって二つに細別できる。Aは創造する集団で、地域の拠点集落としてその後も継続し発展していく。Bは創造しない集団で、継続・発展する場合もあるが、廃絶・移転などによって不連続な発展を遂げる集団が多い。集団規模が小さかったり、水田面積を拡大できないなどの要因が考えられる。以下、次のようにまとめることができる。

**在来民単独で造った農耕集落** 福岡市田村・四箇遺跡（図3-4・5）を代表とする。もっとも遅れて農耕民化する集団で、縄文以来の本拠地に農耕集落を造る。少なくとも縄文後期以来、河川の中・上流域で栽培を含む網羅的な生業構造をもっていた在来人は、前5世紀以降に本格的な農耕生活へ転換した集団が下流域に現れても、自らの生活を変えることはなかった。しかし下流域の農耕民集団が人口増加によって不足した食料を生産するための新たな可耕地を、中・上流域にある彼らのテリトリーに求めたことが転機になって農耕民化したと考えられる。したがって農耕民化の原因を作ったのは下流域の農耕民、それに対応して農耕民化したのが上・中流域の在来民と考えている。

**在来民と外来民がともに造った農耕集落** 前5世紀頃に、それまで在来民が有効利用していなかった下流域に現れた農耕集落である。在来民と外来民が一つのムラを構えるにいたった理由は利害

表2 朝鮮半島・日本出土の栽培植物遺体と関連資料（縄文後期～弥生前期併行期）

年代	編年	朝鮮半島	玄界灘沿岸地域	その他の九州	西日本	東日本
2000 B.C.	縄文後期前半以前	東三洞（アワ）		古閑原（コメ？）	鳥浜（リョクトウ、ヒョウタン） 朝寝鼻（コメP） 粟津（ヒョウタン） 桑剣下（アズキ、ダイズ） 桂見（リョクトウ） 姫笹原（コメP）	ハマナス野（ソバ） ナスナ原（エゴマ） 大石（エゴマ） 上野（オオムギ） 荒神山（エゴマ） ツルネ（オオムギ、エンドウかダイズ） 桜網（リョクトウ）
1500	縄文土器時代後期 後期後半	南京（アワ） 智塔里（アワ）	四箇A（オオムギ・アズキ？） 四箇東（コメ・オオムギ：いずれもP） 板付（ヒエP）	丸山（リョクトウ） 東鍋田（コメP） 上ノ原（コメ、オオムギ、マメ類、ソバP） ワクド石（コメ？） 古閑原（コメ） 小原下（コメ）	南溝手（コメ） 津雲（コメ）	石亀（ソバP） 東風泊（ソバP）
1000	縄文晩期	漁隠（コメ・コムギ・アワ・マメ） 玉房（コメ・マメ） 南京（コメ・アワ・モロコシ・ダイズ）	広田（アズキまたはリョクトウ）	筏（コメ、エンバク） 礫石原（コメ） 大石（コメ、アワ？） 陣内（ヒエP）		
500	無文土器時代前期 弥生早期	欣岩里（コメ・オオムギ・アワ、モロコシ） 石灘里（アワ・アズキ） 松菊里（コメ） 大坪里（コメ） 検丹里（コメ・アワ・ヒエ） 大也里（コメ） 鳳溪里（コメ・ダイズ）	菜畑（コメ・アワ・アズキ、オオムギP） 宇木汲田（コメ） 曲り田（コメ） 板付（コメ、ソバP） 灌漑水田の出現	山の寺（コメ） 原山（コメ） 脇岬（オオムギ） 丸山（コメ） 長行A（コメ） 恵良原（コメ？） 萩原（コメ）	名越（コメ） 青木（ヒエ、キビ） 口酒井（コメ） 今宿丁田（コメ） 鬼塚（コメ） 長原（コメ） 京大構内（コメ）	亀ヶ岡（コメ？） 九年橋（ソバP） 真福寺（ヒエ、リョクトウ、ソバ、ゴマ）
300	弥生前期		菜畑（ソバP） 夜白（オオムギ） 板付（アズキ、コムギP） 立岩（アワ） 諸岡（オオムギ・モロコシ・アズキ？）	犀川（コムギ） 松ヶ迫（マメ類）	綾羅木（キビ？、モロコシ、コムギ、アズキ？） 宮原（オオムギ、コムギ、ダイズ） 津島（ヒエ） 納所（ソバ）	凡例 強調：遺体 P：プラント・オパール 標準：珣痕土器 剣吉荒町（コメ） 是川（コメ） 砂沢（コメ） 荒海（コメ、コメP）
200	後期	虎谷（アワかキビ） 屯内（アワかヒエ、ダイズ、アズキ） 勒島（コメ）				

Fig. 2 Sites with excavated cultivated plants in Korea and Japan (dating to the Late Jomon to Early Yayoi)

Date	Period	Korean Peninsula	the coast of Genkai Sea	other of Kyushu	western Japan	eastern Japan
2000 B.C.	Chulmun Pottery period	Dongsandong(foxtail millet)		Kogabaru(rice?)	Torihama(mung, bottle gourd) Asanebana(rice<p>) Awazu(bottle gourd) Kuwagaishimo(azuki bean, soybean)	Hamanasuno(buckwheat) Nasunahara( <i>Perilla frutescens</i> ) O'ishi( <i>Perilla frutescens</i> ) Ueno(barley) Kojinyama( <i>Perilla frutescens</i> )
					Katsurami(mung) Himesasahara(rice<p>)	Tsurune(barley, pea or soybean) Sakurado(mung)
1500		Namkyung(foxtail millet) Zitabri(foxtail millet)	Shika A(barley, azuki bean?) Shikahigashi(rice<p>, barley<p>) Itazuke(barnyard millet <p>)	Maruyama(mung) Higashinabeta(rice<p>) Uenoharu(rice, barley, bean, buckwheat<p>) Wakudoishi(rice?) Kogabaru(rice) Koharashita(rice)	Minamimizote(rice) Tsugumo(rice)	Ishigame(buckwheat<p>) Higashikazadomari(buckwheat<p>)
1000			Hirota(azuki bean or mung)	Ikada(rice, <i>Avena sativa</i> L.) Kureishibaru(rice) O'ishi(rice, foxtail millet?) Jin'nai(barnyard millet, <p>)		
500	Early Mumun Pottery period	Eueun(rice, wheat, foxtail millet) Ogban(foxtail millet, bean) Namkyung(rice, foxtail millet, sorghum, soybean) Heunamri(rice, barely, foxtail millet, sorghum)				Kamegaoka(rice?)
		Odong(foxtail millet, soybean ) Songgukri(rice) Daepyungri(rice) Gumdanri(rice, foxtail millet, barnyard millet) Daepyungri(rice) Bongyeoni(rice, soybean)	Nabatake(rice, common millet, azuki bean, barley<p>) Ukikunden(rice) Magarita(rice) Itazuke(rice, buckwheat) <i>appearance of oldest paddy field in Japan</i>	Yamanotera(rice) Harayama(rice) Wakimisaki(barley) Maruyama(rice) Osayuki A(rice) Erabaru(rice?) Ogiwara(rice)	Nagoe(rice) Aoki(barnyard millet, common millet) Kuchisakai(rice) Imajukuchoda(rice) Onizuka(rice) Nagahara(rice) Kyodai-Konai(rice)	Kunenbashi(buckwheat<p>) Shinpukuji(barnyard millet, mung, buckwheat) <div>Example: <b>Bold: Plant remains</b> &lt;p&gt;: Phytoliths other: grain remains impression on pottery</div>
300			Nabatake(buckwheat<p>) Yusu(barley)	Saikawa(wheat) Matsugasako(legume)	Ayaragi(sorghum?, wheat, azuki bean?) Miyahara(barley, wheat, soy bean)	
		Hogok(foxtail millet or common millet) Tonnai(foxtail millet or barnyard millet, soy bean, azuki bean) Nukudo(rice)	Itazuke(azuki bean, wheat<p>) Tateiwa(foxtail millet) Moro'oka(barley, sorghum, azuki bean?)		Tsushima(barnyard millet) Noso(buckwheat)	Kenyoshiaramachi(rice) Korekawa(rice) Sunazawa(rice) Arami(rice, rice<p>)
200	Late Mumun Pottery period					

の一致だったと考える。それぞれが目的をもっていたという点で相互依存的であり、どちらが主体であったというわけではない。板付Ⅰ式土器創造の有無と、その後の転換過程によってAとBに細別する。

A 環壕集落を形成して地域の拠点集落となり、核として発展し有力者を生み出していく板付遺跡(図3-8)を代表とする。最古の弥生文化独自の土器である板付Ⅰ古式土器の生産と供給を担っていた可能性がある。

B 那珂遺跡(図3-9)のように環壕集落を形成する集団もあるが、板付Ⅰ古式を創造しない。雀居遺跡(同10)のように継続する集団もあれば、那珂遺跡や野多目遺跡(同6)のように集落を廃絶し、移動してしまうムラもある。

AとBが生じる背景には、外来の人々との関係、生産基盤の違いに基づく集団の生産力の差、土器を生産するムラと供給を受けるムラという分業制なども考えられるが、今後の検討課題である。

## 2 農耕民化の契機・要因

前5世紀ごろに九州北部が食料生産段階にはいる以前にも、二つの農耕文化が朝鮮半島南部から拡散していた。櫛目文畠作文化と孔列文畠稲作文化である。これらは結果的に縄文人が農耕に專業化する契機とはならなかったものの、いくつかの新しい文化要素を西日本縄文社会にもたらしている。まずこの点からみてみよう。そのあとで、縄文人が食料生産段階へ転換する契機となった朝鮮半島水稻農耕文化についてふれる。

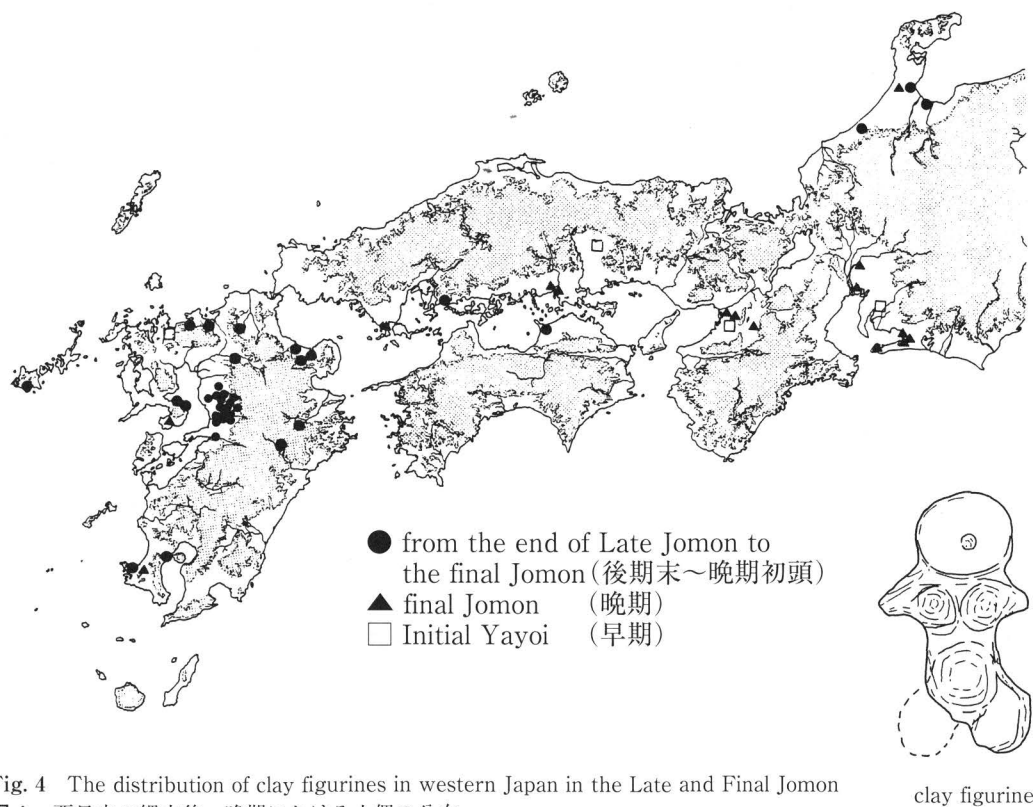


Fig. 4 The distribution of clay figurines in western Japan in the Late and Final Jomon

図4 西日本の縄文後・晩期における土偶の分布

## 1) 櫛目文畠作文化の拡散

西日本の縄文社会に変化が現れ始めるのは前1500年ごろである。土器づくりの簡素化と単純化、穀物・雑穀資料の急増（表2）、縄文の製作技法で作られた農具様石器の出現、土偶祭祀の活発化（図4）などで、技術・祭祀面に現れる変化である。南溝手遺跡にコメが出現したのもこの拡散と関係があると思われる。

これらの変化は漁撈民型の交流<sup>(6)</sup>によって櫛目文土器時代後期の雑穀栽培に関する情報が断片的にもたらされたことに起因すると考えられる。櫛目文土器が対馬・壱岐などの島嶼部、および福岡・佐賀・長崎の玄界灘沿岸部で出土し、九州の内陸部にもたらされることはないこともわかる。この畠作は、打製石斧、打製収穫具、鞍形すり臼などの石器を使い、東三洞貝塚で見つかったアワなどの雑穀を栽培・収穫・加工する栽培活動を生業の一部にもっている文化で、慶北・松竹里遺跡を代表とする。その中にコメが含まれていた可能性も否定できない。縄文人は生業の一部に栽培活動を位置づけ、本格的な農耕をおこなうことはなく網羅的な生業構造を維持していたと考えられる。

## 2) 孔列文畠稲作文化の拡散

前7世紀頃になると、それまで九州北部沿岸部だけにしかみられなかった朝鮮半島の土器やそれを模倣した土器が、九州・中国地方の内陸部でも出土するようになるとともに、紡績具や磨製石庖丁などが初めて出現する。

これらの変化は前10世紀頃に朝鮮半島南部でおこなわれていたイネ・ムギ・マメを作物とする畠作文化に対応したものであった可能性が高い。慶南・漁隠遺跡1地区では、畝だての整った3ヘクタールを超える畠が調査されている（図5）。加工用の大陸系磨製石器や収穫用の磨製石庖丁など、農工具もすでに定型化したセットをもつ〔李 1998〕。

以上の畠稲作情報が九州北部にもたらされていた可能性は十分に考えられるが、土器や石器の組

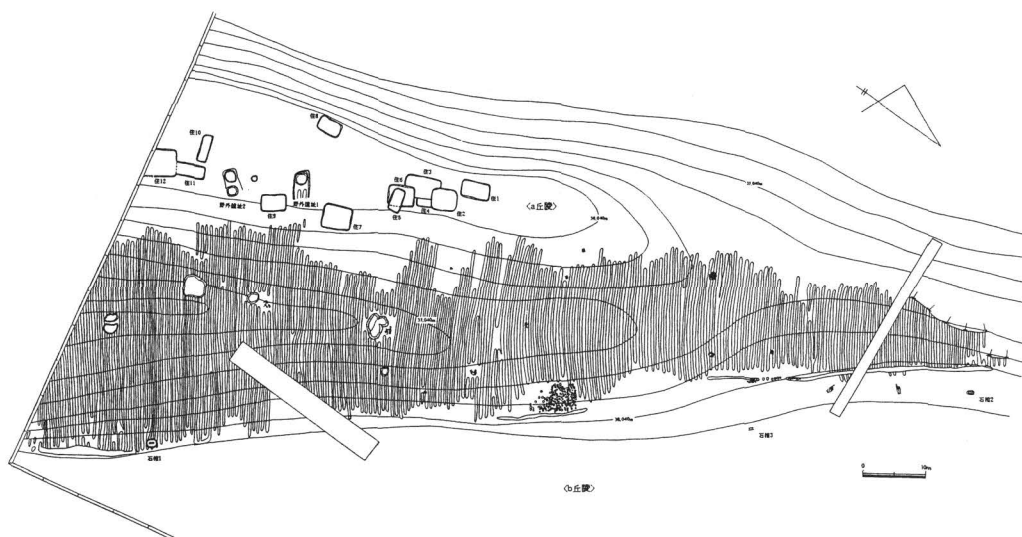


Fig. 5 Field discovered from Eueun site Kyongsangnam-do Korea : early Mumun Period

図5 韓国慶尚南道漁隠1地区の畠跡（無文土器時代前期）

成、社会組織、土偶祭祀などに基本的な変化は認められない。むしろ土偶祭祀などは活発化していることが指摘されている。櫛目文畠作文化と同様、漁撈民型交流によって情報が断片的にもたらされたと考えられるが、もたらされる地域は前代に比べて九州東部方面や瀬戸内に拡大していることから、拡散の流れはかなり強かったものと考えられる。

櫛目文畠作、孔列文畠作とも、西日本の縄文社会を変えるだけの契機とはならなかった。しかし次に訪れた波は質・内容とも比較できないほど異質なものである。

### 3) 朝鮮半島水稻農耕文化の拡散－検丹里型水稻農耕文化－

前5世紀頃になると、九州北部沿岸地域において、稲作関連の技術面に大転換が起こる。水稻を収穫する石庖丁、木製農具、木製農具や杭・矢板を大量に製作する大陸系磨製石斧、鉄製工具など、朝鮮半島南部と基本的に共通する新しい利器類の出現である。また在来の土器様式（突帯文土器様式）のなかに、農耕生活に不可欠な貯蔵用の壺が加わるとともに、煮炊き用の新たな土器が中期無文土器を祖型に創造される（図6）。

これらの変化を引き起こしたのが前7～6世紀に朝鮮半島南部で始まった本格的な水稻農耕と、環壕集落を指標とする農耕社会の成立である。どんなに広い面積の畠でコメを作っても社会の質的变化が起こらなかった朝鮮半島で、水稻農耕の始まりとともに環壕集落が成立したのである。

慶南・玉峴遺跡で見つかったのは、丘陵の谷部に掘削した断面逆台形の壕によって集められた雨水などを利用した小区画水田であった（本書108頁図5）〔慶南大・密陽大 1999〕。やや後出する慶南・検丹里遺跡では水田こそ見つかっていないが、水稻農耕を生産基盤とした環壕集落が見つかっている。

このような水稻農耕文化を背景にもつ朝鮮半島中・南部の人々が、血縁集団を単位として九州北部沿岸地域の下流域に入り、在来民との相互交流を開始して、ともに農耕集落を造り、水田を拓いたことが、このような大転換の契機になったと考えている。農耕民型交流<sup>(7)</sup>と呼ばれているものである。下流域には在来人＋外来人型の農耕民化が起こり、中・上流域の在来人との間で生業構造を異にする集団の住み分けが起こる。

最後の金属器文化を背景にもつ外来の人々が、縄文人の農耕民化にあたって大きな役割を果たしたのは確かだが、在来人が農耕化へと動き出すには経済面以外の理由が必要である。先にみたように在来人の農耕民化には時間差があった。すべての在来人が一気に転換したのではなく、早い遅いが認められたのである。特に各平野において縄文後期以来、在来人の拠点的なムラでの農耕民化がもっとも遅れたことが、板付系土器の出現する時期からわかる。

農耕民の集落がもっとも早く出現した下流域にはそれ以前の在来人の拠点的なムラは確認されていないし、少人数の外来人だけでは広大な面積をもつ水田や環壕の掘削はできないので、在来人との交流なしには農耕集落が成立しなかったことは明白である。

北西ヨーロッパでは、在来人の中でも好奇心が旺盛な若年層から、外来の農耕民との接触を持ち始めたのではないかと、いう説がある〔デンネル 1985〕。彼らを魅了したのは、金属器や大陸系磨製石器、武器などの最先端技術・利器、ガラス製玉などの装飾品であったのかもしれない。

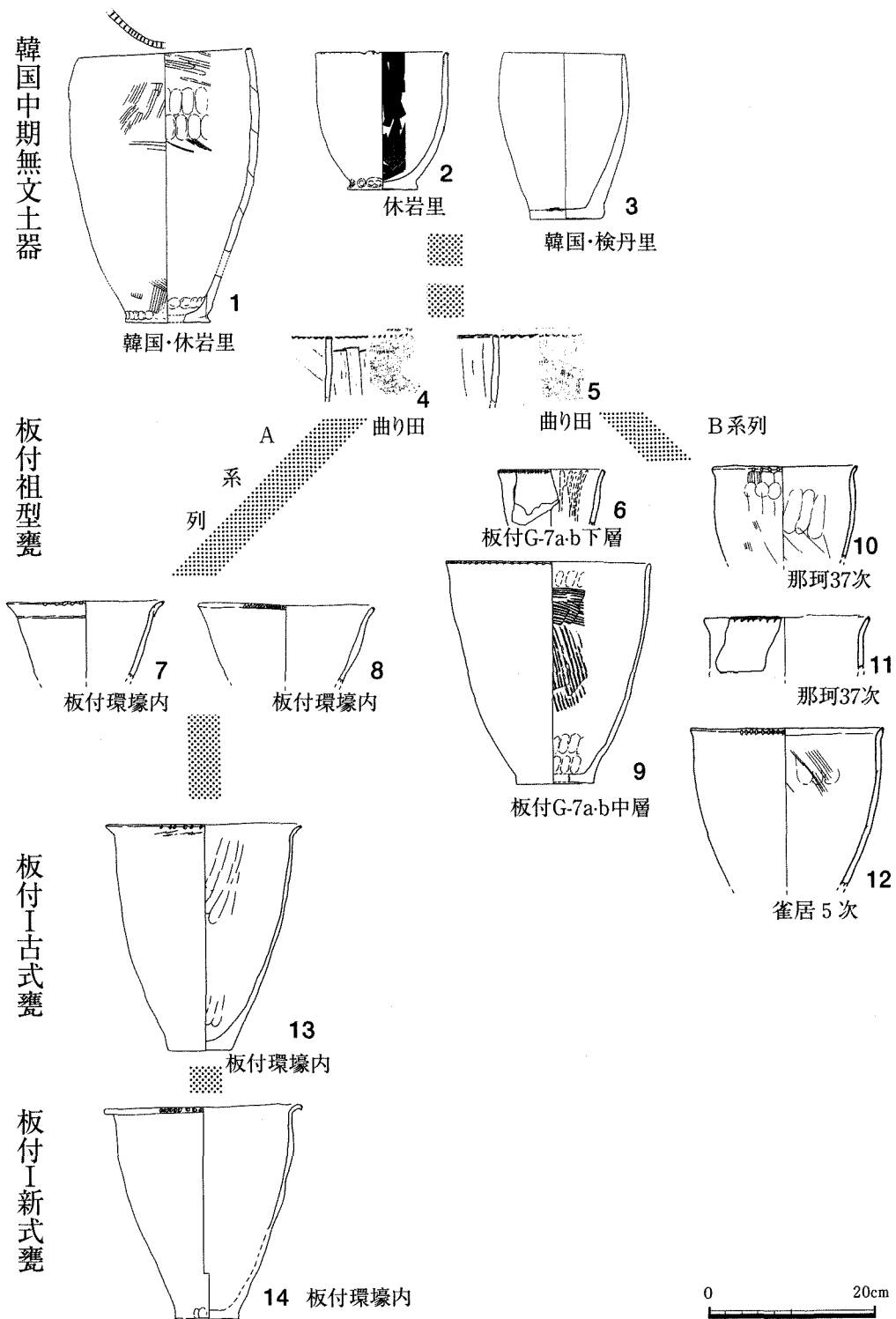


図6 祖型甕から板付I式甕への型式変遷図（縮尺1：8）

Fig. 6 The illustration of the process from the original type pottery to Itazuke I type pottery for cooking : scale 1:8

## 5. 農耕社会 3 段階成立説

前5世紀ごろに起こった生産・経済的側面の質的転換を農耕社会成立に向けての第1段階とすると、さらに二つの側面における質的転換をへて、九州北部の農耕集団は農耕社会を完成させていく〔藤尾 2000〕（図8）。

### 1) 第2段階－社会面の質的転換－

前4～3世紀頃になると水稻生産も安定し、下流域の社会に新たな質的転換が起こる。転換は主に社会面に起こっていることが、環壕集落の出現、戦いの始まり、住居域と墓域の分離、副葬の開始、階層差の顕在化などの考古学的事実からわかる。また板付Ⅰ古式様式という新しい農耕用の土器の組み合わせが完成する。

現在のところ、この土器様式がみられるのは板付遺跡だけで、那珂、雀居、江辻などの最古級農耕集落にみられるのは板付Ⅰ新式以降である。

しかし板付をのぞく遺跡にも、少しずつではあるが祖型甕や、祖型甕と板付Ⅰ古式甕との中間的要素をもつ土器がみられることから、在来人＋外来人型に属すそれぞれの集落においては弥生独自の農耕用土器の創造がおこなわれていたことは間違いなさそうである。ただそのなかでもその後の遠賀川・遠賀川系土器への直接的な系譜足りうるものを生み出したのは板付だけであった可能性を考えている。

以上のように、前4～3世紀を、社会的側面の質的転換期として、農耕社会成立の第2段階に位置づける。

### 2) 第3段階－祭祀面の質的転換－

前2世紀前半になると、農耕生活を円滑に営む上で、またコメの豊作を願うために必要な祭祀面の質的転換が完成する。イネの祭りを中心とする農耕祭祀の完成と定着、水田や畠といった不動産を代々相続していくために必要な装置である祖先祭祀で用いる木の鳥や木偶、そして祭祀に不可欠な祭具である朝鮮式青銅器が出現する。

この段階を、祭祀面の質的転換期として、農耕社会成立の第3段階に位置づける。

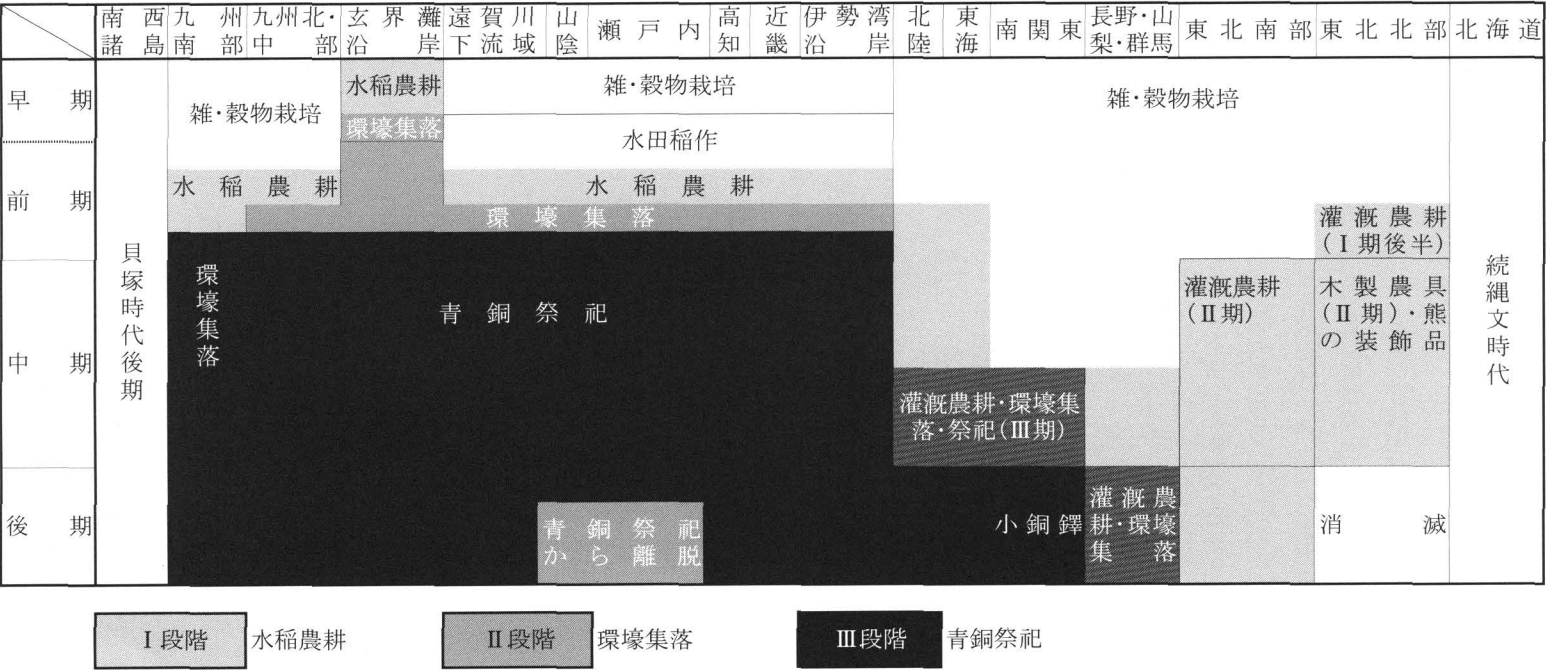
### 3) 小結

今まで述べてきたように、前1500年頃に変化をみせ始めた西日本の縄文文化は、前5世紀頃に第1の画期である生産・経済面の質的転換、前3世紀頃に第2の画期である社会面の質的転換、そして前2世紀前半頃に第3の画期である祭祀面の転換を達成し、弥生型の農耕文化が完成したのである。

## 6. 弥生文化成立の世界史的意義

### 1 渡来人の故地

コメや穀物栽培を知ってから千年以上も生業の補助的な手段に穀物・雑穀栽培を位置づけ、網羅的な生業構造を維持してきた縄文人が、前5世紀ごろになってようやく水稻栽培を基本とする生活に転換して、農耕社会成立への道を歩み始めた直接的な契機を、検丹里型水稻農耕文化と金属器文化を背景にもつ朝鮮半島中・南部から九州北部に渡ってきた無文土器時代人に求めた。しかし彼らはなぜ日本列島に渡ってきたのであろうか。



Tab. 8 The Illustration of the three Stages of the Formation of Agricultural Society in Japanese Archipelago  
 図8 日本列島における農耕社会の三段階成立模式図

弥生文化が始まる契機に関しては、外的要因と内的要因の二つに求める議論があった。そのうち外的要因説の基本は、大陸・朝鮮半島から人々が九州北部に南下することに求めるものだが、南下の主な原因としては戦乱亡命説〔岡 1958, 森 1968〕, 遼寧式青銅器文化南下説〔秋山 1968・1969, 春成 1990〕, 気候変動説〔金関丈夫 1955〕がある。

検丹里型水稻農耕文化の拡散が、これらの諸説のどれと密接に関わっているのか証明できる直接的な証拠は依然として見つかっていない。ただ中期無文土器時代の環壕集落が朝鮮半島南部でかなり見つかりはじめたことから考えると、この地域における農耕社会の成立が人口を増加をもたらし、可耕地不足を引き起こした結果、海を渡ったという人口圧説が議論の俎上にのり始めたことだけは確かであろう。戦乱説についてはまだ状況証拠の域を出ていない。気候変動説は弥生の小海退をもたらし寒冷化が該当するが、時間幅があるため、前5世紀頃に限定できないという難点がある。

## 2 世界史的意味

次にこれまでみてきた弥生文化の成立過程にみられる世界史的意味について考えてみよう。四つの視点を用意した。

第1に、穀物の伝播地における農耕文化という視点。弥生文化は穀物の野生種が存在しない地域の人々（縄文人）が、外から持ち込まれた栽培植物（コメ）と栽培技術を導入して始めた、農耕生活（水稻農耕）を生産基盤とする文化である。この点は朝鮮半島中期無文土器文化以降も同じ条件下にある。

そのため、原産地のコメとの遺伝的特性が異なることはいうまでもなく、日本列島に到達する以前に、山東半島、朝鮮半島中・西部という2カ所において遺伝的変異が加えられた可能性がある。

第2に、文明の中心から遠く離れた地域で成立した農耕文化という視点。日本列島は中原からあまりにも離れていることに起因して数々の特徴をもつ。たとえば新旧の要素が一緒に、また要素においては逆転して伝わってくるという特徴をもつ。たとえば大陸系磨製石器と鉄器の同時出現や、鉄器が青銅器に先駆けて出現するのはこの代表である。<sup>(8)</sup>

第3は第2の条件に起因する。弥生文化は水田稲作と金属器（青銅器や鉄器）を特徴とする文化という視点。イネの原産地では水田稲作が数千年前から始まっていたが、山東半島に伝わるのが前3千年紀、朝鮮半島には前7～6世紀頃に伝わった。水田稲作はここで遼寧式青銅器文化と接触し、検丹里型水稻農耕文化が成立する。弥生文化が成立するのはこれからわずか百年後である。

第4に、弥生文化の成立にあたっては、日本列島にもともと住んでいた在来人以外の人間が生産・技術面だけでなく社会面や祭祀面を中心に関与したという視点。

以上のような4つの視点から、なぜ縄文人が前5世紀頃に農耕生活へ転換したのか、という冒頭の問いに対する答えが浮かび上がってくる。つまり水田稲作と青銅器文化が統合された文化が外来の人々によって持ち込まれたときに、大きな転換が起こったことの評価である。

弥生文化の特徴をさらに浮き彫りにするために、日本列島と同じく文明の中心から遠く離れた北西ヨーロッパにおける、農耕文化の始まりと比較してみよう（表3）。

この地域に穀物栽培が伝わるのは中近東で野生のムギ類の収穫が始まってからほぼ7千年あとの

表3 ブリテンと日本の編年対照表（旧石器～古墳時代併行期）

Tab. 3 The time table of Britain and Japan : in period which is contemporaneous with from Paleolithic to Kofun Period

Date 年代	England イギリス	Japan 日本
12000B. C.		Paleolithic 旧石器時代
10000B. C.	Paleolithic 旧石器時代	
9000B. C.		Incipient Jomon 草創期
		<i>Late Glaciation 後氷期</i>
8000B. C.	Earlier Mesolithic 前期中石器	
	<i>Late Glaciation 後氷期</i>	
7000B. C.		Initial Jomon 早期
6000B. C.	Later Mesolithic 後期中石器	
5000B. C.		
4000B. C.	<i>Forest Destruction</i>	<i>Centered on the marine transgression 縄文海進のピーク</i>
	<i>Temperate: Heavy Rain</i>	Early Jomon 前期
		三内丸山遺跡 Sannai-Maruyama
3000B. C.	Earlier Neolithic 前期新石	Middle Jomon 中期
	Avebury	
	Stone Henge	
	Late Neolithic 後期新石器	
2000B. C.	<i>Temperate: Dry</i>	
		Late Jomon 後期
	Earlier Bronze 前期青銅器	
		<i>the marine digression</i>
1000B. C.	Late Bronze 後期青銅器	
		Final Jomon 晩期
500B. C.		Initial Yayoi 早期
	Iron Age 鉄器時代	Early Yayoi 前期
		Middle Yayoi 中期
		<i>the marine digression</i>
1B. C.	Roman Age ローマ時代	Late Yayoi 後期
	<i>Roman Conquest ローマの征服</i>	
500A. D.		Kofun Period 古墳時代

前4千年ごろである。日本列島と同様、野生のムギは自生しないので、地中海性気候に適応したムギが、冷涼な北西ヨーロッパの気候に適応するためには、数千年にわたる改良期間が必要であった。

アイルランドやユトランド、北海沿岸の中石器時代人のなかには、穀物や栽培を知らながらも数百年から数千年にわたって農耕生活に入らない人々の存在が知られている。そんな彼らが農耕生活にはいったきかけはさまぎまである。ユトランドのエルテベレー文化のように冷涼化に伴いカキを中心とする水産資源がとれなくなったことが原因の人々もいるし、祖先祭祀をおこなう際の儀礼食として食べる穀物や肉類を得る目的で穀物栽培や動物飼養を始めたと考えられているブリテン島の人々もいる。またスカンジナビア南部には、外来の農耕民が進出することによって農耕生活が始まった地域がある。

日本列島の場合、前15世紀以降に、少なくとも2回にわたった朝鮮半島島作文化の拡散を受けながらも、縄文社会に質的な転換は起こらなかった。

それが前5世紀には、遼寧式青銅器文化という祭祀体系を灌漑農業という生産手段の上部構造としてもつ検丹里型水稻農耕文化が、ある程度まとまった集団を単位とする外来人の渡来によって、文化複合体としてもたらされた時、在来人が本格的な農耕生活へと転換したのである。

つまり石器文化と稲作という組み合わせが、情報主体の漁撈民型交流<sup>(3)</sup>で伝わった際には本質的な変化をみせなかった縄文社会が、金属器文化と灌漑農業という組み合わせが農耕民型交流<sup>(4)</sup>によって拡散した時に質的に転換したことになる。朝鮮半島で前7～6世紀に起こった現象と同じことが日本列島で起こっていたのである。渡来人の存在は、労働組織や社会システムといった社会面、青銅器を中心とする祭祀体系など、高文明化を進めていく上で必要なソフトウェアを定着させる際に、重要な役割を果たしたと考えられる。これこそが渡来人の果たした役割なのである。

以上をまとめてみると、弥生文化とは、文明の中心から遠く離れた辺境の地において、千年以上もの長期にわたり、穀物栽培の存在を知らながらも、農耕生活へと転換しなかった定住民が、灌漑農業を生産基盤とする金属器文化とそれを母胎とする祭祀体系を備えた外来民の渡来を契機に、農耕生活への第一歩を踏み出したことで高文明化に向かって進み出した、九州・四国・南関東以西の本州上の文化ということができよう。

## おわりに

かつて発展段階論がはやかなりし頃、農耕は人類が進化するにあたってかならず採用しなければならない手段であった。農耕の開始こそ、人類が国家を形成し高文明化を達成するための必要条件だったのである。

したがって縄文人はコメを知れば直ちに農耕生活へと転換するものと当然のように考えてきた。しかし実際は違っていた。縄文人が農業を始めたのはコメを知って千年以上もたった前5世紀頃だったのである。

このような疑問を持ち始めてからほぼ10年、完新世適応の一パターンにすぎなかった農業の目的もまた、高文明化を目指したものではなかった。このように農業に対する固定観念が崩れていく一方、農業を採用した集団、国家から、現代へとつながる体制ができあがってきたこともまた事実なのである。

## 註

(1)——本稿は2001年3月に脱稿したので、年代表記は従来の年代観にしたがっている。

(2)——島根県板屋Ⅲ遺跡の縄文前期末に相当する包含層から、キビ属とイネのプラント・オパールが見つかったという。C14年代は、ヤンガー・ドリラス期直前の10950B.P.と報告されている。

(3)——この部分は弥生時代の始まりがさかのぼることによって、もっとも大きな影響が出る部分である。ここで前10世紀と書いてあるのは、まったくの偶然である。

(4)——縄文晩期初頭にほぼ併行する慶南・漁隠遺跡の住居跡からコメ・アワ・ムギなどが一緒に見つかった〔李1998〕。畝だてした畠も見つかっているが、水田ではなく畠稲作である。しかし、コメが単作されていたというよりも、雑穀や他の穀物と混作されていた可能性も考えておく必要がある。

(5)——この問題については次の文献を参考にしてほしい。藤尾 2002：『縄文論争』講談社メチエ。

(6)——縄文前期以来の外洋性漁撈を生業とする漁民達をとしておこなわれる交流。結合式釣針や石鋸の分布と穀物類の分布範囲がほとんど重複していることからわかる。文化全体ではなく断片的に要素が伝わる。

(7)——水稻栽培を生業とする中期無文土器時代人が渡来することによっておこなわれた交流。水稻農耕文化複合体全体が伝わる点が、漁撈民型交流と異なる点である。

(8)——1960年代に注目されたこの特徴は、弥生開始年代の遡上によってもっとも影響をうけた点である。較正年代にしたがうかぎり、弥生時代は石器時代として始まった可能性が出てきた。

## 参考文献

- 秋山進午 1968・69：「中国東北地方の初期金属器文化の様相（上・中・下）」（『考古学雑誌』53-4, 1-29, 54-1, 1-24, 54-3, 21-47）。  
李 相吉 1998：「大坪漁隠1地区遺跡出土の畠跡」（『南江ダム水没地区の発掘成果』99-100, 嶺南考古学会）。  
岡 正雄 1958：「日本文化の基礎構造」（『日本民俗学大系』2, 12-14, 平凡社）。  
金関丈夫 1955：「人種の問題」（『日本考古学講座』4, 238-252, 河出書房）。  
慶南大学校・密陽大学校 1999：『蔚山無去玉舘遺蹟』。  
啓明大学校博物館 1994：『金稜松竹里遺蹟特別展図録』開校40周年記念特別展図録。  
高橋 護 2001：「西日本における縄文時代の生業と集落」（『島根考古学会誌』18, 1-14）。  
デンネル, R.W.1985：The hunter-gatherer/agricultural frontier in prehistoric temperate Europe.  
In S. W. Green & S. M. Periman (eds.) *The Archaeology of Frontier and Boundaries*. Academic Press, INC.  
春成秀爾 1990：『弥生時代の始まり』東京大学出版会。  
平井泰男 1995：「縄文時代後期の稲作について－靱痕土器とプラント・オパール分析結果から－」（『南溝手遺跡1』1418-1421, 岡山県立大学建設に伴う発掘調査Ⅰ, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100）。  
藤尾慎一郎 1998：「福岡平野における弥生文化の成立過程－採集狩猟民と農耕民の集団関係－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』77, 51-84）。  
藤尾慎一郎 2000：「弥生文化の範囲」（『倭人をとりまく世界』2000年前の多様な暮らし, 158-171, 山川出版社）。  
藤本 強 2000：「植物利用の再評価－世界的枠組みの再構築を見据えて－」（『古代文化』52-1, 1-15）。  
釜山大学校博物館 1995：『蔚山検丹里マウル遺蹟』。  
森貞次郎 1968：「弥生時代における細形銅剣の流入について」（『日本民族と南方文化』127-161, 平凡社）。  
吉崎昌一 1995：「日本における栽培植物の起源」（『季刊考古学』50, 18-24）。